対談
親の声

どの子の進路希望にも心くばりをしてほしい

本「おひさしぶりです。お忙しい中すみません。」

一昨年、ＰＴＡの副会長をされていた近藤さんと現副会長の吉倉さんにご挨拶をした。このお二人のお父さんは一九九二（平成四）年度卒業生のＰＴＡのリーダーだ。お二人の名コンビで造り上げた学年ＰＴＡ活動に支えられ"どの子の進路希望にも心くばりをする"進路指導体制への道を模索した私たち。その三年間の学年団と保護者の交流を振り返っていただくため時間をさいていただいたのだ。二時間余におよぶ対談を要約してみた。

＊「進路選択」に当たってこどもたちに望むこと

吉　失敗を恐れず、チャレンジすることですね。安全パイをひろう風潮が今の子はちいさい時からあるようですネ。大学受験期がその仕上げ時、自分はこんなところだって思ってしまって小中の段階で親や学校はこどもが伸びたいと思っている面をみつけて挑戦させてほしい。失敗を恐れず自分の道は自分でつけている小さな練習を沢山させなくてはとつくづく思いました。

＊保護者のまとまりが強かったのはお二人の力？

近　と言いますより、学年の先生方の熱心な応援と、

気持ちの通じ合う学年の役員構成、それにみなさんの理解と協力がありましたからと思います。

近年で一番生徒数の多い学年でしたので、進学一つとっても自分たちの育った時と社会情勢がまったく違いますので、親は皆不安でした。それだけに団結心があったのかも……。

いくつかの学級のクラス懇談会が人の輪を広げていきました。テーブルを囲んでの世間話からの子育て談義の中で「また集りたい」となっていったのです。その中のリーダー格の人が学年が上がっても学級がちがっても、進路情報ネットワークの中心になってくれていました。また生徒の部活動を通しての父母の甲斐のみなさんの力も大きかったと思います。

＊学校の進路指導体制に望むこと

吉　平日、仕事を休んだのに個人面談一〇分間にガクッときたという話はよくでました。先生方もお忙しいのでしょうが…。進路相談週間（月間）を決め、TとPお互いに時間を調整する等改善の余地ありです。

近　予備校の講師を呼んでの進路講演会、一年生のときは厳しい数字で脅かされたって感じでした。二年三年次にも一般論の同じ話では…。

学年で催した違った見方からの、なぜ大学に行くのか、いかに学ぶのか人生観などを交えての講演をして下さった時事通信の方、大学の英語の先生お二人の講演のほうが、こどもたちには意味があったのでは…

講演を聴いた親も参考になったと好評でした。

＊どんな教育情報が進路指導に必要でしょうか

吉　こどもたちは自分はこの方面の道を目指しているが自分の力だとどんな大学があるか、自分たちの先輩の実力をしっている先生がどんなデーターをそろえているかと現実的に考えています。この高校の実態にあった大学を視察したり、そこに入った生徒たちの勉強ぶり、生活などを聞かせてくださることも考えていただければと思います。

近　私たちは、この高校を地域のすばらしい高校と誇りに思っている親は沢山おります。ですから、学校への協力は惜しみません。親同志の情報交換はこどもたちを複眼的に見るためには大切な事だと思いました。学年の先生方が国公立受験者、私立大学文系、理系受験者、看護学校受験者、専門学校受験者、公務員、就職試験受験者等々、クラス担任とは別に担当を受け持って、情報がていねいにとどくようにしていただいたこともあって、わが子の進路をわりとフランクに話し合え、そんな出会いをした親が「よかったですね、次もまた」と点が線に、線が面にな

っていったのです。

こんな状況がもっと気安く先生方の応援で出来るといいと思います。

＊その他、学校のことで感じておられることは

近 県の予算付けはどんなものなのでしょうか、施設の不備や補修をしなければならないようなところもいろいろあるようですし、学校周囲の環境整備も年次的計画の上で整備されていったらと思いました。勿論予算という制約もありますが…

吉 生徒会などとも話し合ってみたいと思いました。学校、親、子が一体になり目標に向かって力を合わせていけば、尚一層良くなるのではないでしょうか。

ながいお付き合いの中のいろいろの出来事を振り返りながらの二時間は短かった。文章にまとめるとなにか意のつくせないものになってしまった。お二人にお許しを願う次第である。それにしても、小学校、中学校、PTA、そして地域の少年の中でサッカーチームや野球チームを後援されたりすごいパワーである。おかあさんPTA型玄関先で本番の話に入る状況をぬけて草の根の人間の輪を作っていく方に出会って良かった。

（ほんだ　としひこ＝新潟西高校旧職員）

三年間ですっかり大人びた子どもたちが、今、学園を巣立っていきます。学年団をくんだ先生方の感慨もひとしおです。「こんなにも沢山の子どもたちの名を憶えた事はなかった。」と、みんな思っています。毎週のようにひらかれたコーヒー、紅茶とちょっとしたお菓子づきのお茶会で、子どもたちの姿が様々語られ、現実の高校生像が私たちの中で豊かになっていきました。生徒会執行部づくりにも協力し、体育祭などの工夫もこらしました。スキー授業、修学旅行等の諸行事で生徒たちがお互いに深く知り合い、仲よくなるように努めました。

次第に子どもたち一人一人の生い立ち、性格、将来への希望が、また家庭環境、経済状況がみえて来ました。そして「四年制大学をめざして!!」と大ざっぱなハッパをかけたり、「家庭環境にめぐまれた良い子」だからと自由放任主義に流れたりする子ども観をもっていては指導できない事がわかって来ました。

学級担任を通じての指導という枠だけにこだわらず、生徒の進路志望ごとのグループをつくっての指導、それと合せての保護者の方々との話し合いもやってみました。十分なことはできませんでしたが、それぞれの分野で初志を貫徹し、「やった!!」という喜びの声をあげる子どもたちの姿をみて、よかったナーと心から思います。

生徒たちが諸行事の中で、精一杯の青春の若さを燃焼させる事と、それぞれの志望をめざして全力をあげる事、そうした活力を学年に押しひろげていく事が全体が高まっていく道すじなのかも知れないという事も少し見えて来たように思います。今なお、初志貫徹にむかって奮闘している子どもたちも最後まで投げないでがんばってくれる事を心から願っています。

卒業時のPTAだより
（第三九号）平成五年三月一日